魔法のプロジェクト FY23 活動報告書

報告者氏名： 中木 真奈（ 杉原 大輔　 林 一穂 ）　　所属：山口県立山口総合支援学校
記録日：2024年2月20日
キーワード： コミュニケーション　 言葉　 やりとり　 シンボル

【対象児の情報】
・学年　 小学部1年生
・障害名　知的障がいを伴う自閉症
・障害と困難の内容
　有意味言語の発語がなく、児童の想いが周囲の人に伝わりにくい。しかし、頻繁に周囲の人の顔を覗き込むようにして発声する姿が見られ、何か伝えたいことがあるのではないかと考えられる。

【活動目的】
・当初のねらい
　児童が伝えたい言葉を相手に伝わるように発信し、コミュニケーションの相手を限定せずに挨拶や共感の言葉のやりとりができる。

・実施期間
　R5年5月～R6 年2月
・実施者
　中木 真奈
・実施者と対象児の関係
　担任

【活動内容と対象児の変化】
〇対象児の事前の状況
（コミュニケーション）
・有意味語の発語はなし。「およーい」「おっとっと」「ていってぃー」「んー」などの発声あり。教員に向かって、顔を覗き込むように発声することが多い。
・2m 程度離れた場所にいる教員に向かって、発声や手招きのような動作で見てほしいことをアピールする。
・休み時間には、「スイングホースを押してほしい」「一緒にバランスボールに乗ってほしい」などの要求がある。自ら、手を引いたり手ざしをしたりすることで伝える。
・家庭では、母親に対して自らコミュニケーションを取ることがあるそう。児童の発声や手ざしに対して、母親が状況から児童の想いを汲み取っていることが多い。「お茶」「できた」「じょうず」「ばあば」などを伝えているそうである。
（認知面）
・文字や数の概念は未修得。
・就学前に、写真カードを使った要求を学んでいる。2、3回練習すると、イラストでも場所や物の理解ができる。
（情緒面）
・活動場所や集団の大きさを問わず、安定して過ごすことができる。どの学習活動にも積極的に参加することが多い。
・自分の願いが叶わないと、地団駄を踏んで怒ったり大きな声で泣いたりする。

〇活動の具体的内容

使用アプリ：DropTap

（▲児童がよく使うボード）

1） 要求場面の設定（5月～7月）

・DropTap で児童の好きな遊びやおもちゃのイラストを加えたボードを教員が作成し、休み時間の始めに提示した。

児童の様子

・既存のシンボルとおもちゃ等をすぐに結びつけることができているようだった。「プレイルーム」「絵本」「お茶」をよく使った。毎日決まった時間に決まった過ごし方をするのを好むので、最近は要求というよりも「シンボルを押して遊びに行く」というルーティンになっているようにも感じる。

・おもちゃで遊ぶより、プレイルームや中庭で過ごすことが好きということもあり、物を要求する場面があまり設定できず、要求で DropTap を使う頻度は低い。

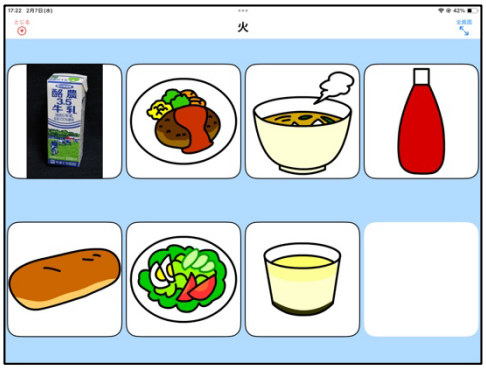
2） 教員が用意したボードの使用

児童が学校にいる間は、児童がいつでも iPad に触ることができるようにした。アクセスガイド機能により、DropTap のみ使える状態の iPad を常時児童の机の引き出しに保管した。児童が特に使うことが多かった場面は以下の通りである。

①朝の会での係活動

・健康観察係、給食の献立係の活動で、DropTap を活用した。

（▲健康観察係の様子）



（▲給食の献立発表に使用するボードの例）

児童の様子

・すぐに使い方を理解し、活用することができた。

・健康観察係では、友達の反応を待つような姿も見られた。

②挨拶

・本児は、登校時に教員に向かって「てぃってぃー」などの発声がよくある。挨拶をしているのではないか、という予想から、「おはよう」など、挨拶のシンボルをボードに加えた。

児童の様子

・毎朝、自分から嬉しそうに「おはよう」と連呼するようになった。教員が気づいていないと、DropTap の教員の写真を連打して呼び止め、とびっきりの笑顔で「おはよう」と伝えている。

・早退する日があり、保護者に教室まで迎えに来てもらった際、担任と保護者が長話をしていると、iPad を取り出して「中木先生」「さようなら」と伝えてきた。早く帰りたかったのか、ただ挨拶がしたかったのかは不明。

・参観日に、お母さんに見にきてもらった。2つの授業を見ていただく予定だったが、児童は1つの授業が終わったら帰ると思っていたようで、情緒が乱れる場面があった。地団駄を踏んで怒りながらも、帰ってほしいという自分の気持ちを「さようなら」で伝えることができた。

・参観日では、友達のお母さんにも iPad を持って近寄り、「こんにちは」と挨拶していた。

③給食場面

・給食中の発声も多いので、料理のシンボル、「美味しい」「不味い」「ください」「ハサミ」をボードに加えた。

児童の様子

・一口食べるごとに「美味しい」と言いながら給食を食べるようになった。隣で食べている担任ではなく、向かいの席に座っている教員に伝えたい様子。

・「いただきます」「ごちそうさま」の挨拶もシンボルをボードに追加しておくと、促されなくても自ら押すようになった。

・6月頃までは、給食前にお腹から食べ物の吹き出しが出ているシンボルをよく押していた。母親から、「『何か食べたい』と言ってるんだと思います」と伺った。「お腹すいた」「お腹いっぱい」の使い分けについて児童に伝えると、給食前は「お腹すいた」、給食後は「お腹いっぱい」と使えるようになった。

・最初は、「美味しい」「ハサミ（切ってほしい）」「メニュー（おかわり要求）」のみを使っていた。9月頃から、配膳時に、給食のメニューで楽しみな物を教えてくれたり、ゼリーの味やパッケージのイラストに描かれている物を教えてくれたりするなど、世間話のような使い方が増えてきた。

（▲給食中によく使うボード）

④個別学習場面

・「手伝ってください」「できた」の2つのシンボルのみのボードで DropTap を使う練習をした。

・使い慣れていくうちに、号令で使う言葉や、「難しい」などの感想の言葉も追加した。

・児童の興味関心に合わせて、学習中に出てくる物の名前のボードを作成した。

児童の様子

・学習中にシンボルを押すように繰り返し促すことで、「手伝ってください」「できた」のシンボルを使うタイミングを理解することができた。

・個別学習の前になると、自分で iPad の画面を個別学習用のボードに切り替えるようになった。個別学習用の棚の写真や「お願いします」のシンボルを押して、「早く始めたい」とアピールすることも増えた。

・以前は、難しいときは「あ!あ!」のような発声や担任の体に触れることで表現していた。DropTap を使い始めてから、発声や身体接触は減り、DropTap で伝えるようになった。

・果物や乗り物の名前、数字の読みを DropTap で確認しながら学習を進めるようになった。

・児童が新たに習得した言葉については、アプリ『bitsboard』で、音声を聞いて正しいイラストを選べるかどうかのテストを行った。初めて行う問題でも、ほとんど正解することができた。

（▲DropTap の画面を開いて活動をする児童）

（▲bitsboard での確認テスト）

⑤その他の場面

児童の様子

・朝の荷物の支度について、「タオル」「連絡帳」など、シンボルを押して確認してから行うようになった。アナログのカード等を使用していた際は、注意が逸れて中断することが多かった。DropTap を使うと、シンボルを押したいからなのか、一連の流れがスムーズになってきている。注意が逸れても、教員が声をかけると、iPad まで戻って支度を再開することができるようになった。

・活動の中でテレビを使う場面があると、必ず「テレビ」のシンボルを押すようになった。「そうだね、テレビ見てね」と声をかけると、「わかってます」か「早くつけて」と言うように、シンボルを連打した。

・友達の様子を見て、DropTap で友達の顔写真とその友達が行っている場所を押し、手を振るような仕草をするようになった。

・参観日に来たお母さんに学級の友達や教員を紹介した。視線はお母さんのまま、シンボルを押して、該当する人を指さすことで伝えていた。

3） 児童の体験と言葉の結びつけ

❶5月～7月

気持ちを読み取って、「楽しいね」「嬉しいね」などの言葉をかけたり、シンボルを見せたりした。

児童の様子

・本児は、楽しいときに笑顔が増えたりリズムを取るように体を揺らしたりする。そのタイミングで、意識的に言葉かけを行った。言葉かけに対して、目を合わせて笑顔を見せてくれるが、自分からシンボル等を使って発信する

ことがなかった。

❷9月～12月

アプリ「わたしのはらぺこあおむし」（現在配信停止）で、あおむしの様子についてやりとりしながらゲームを進めた。ゲームは、遊び（ボール、絵の具、船）、食事（果物）、水やりをしながら、あおむしを蝶に育てるという内容。

児童の様子

・使用開始時、挨拶をするのが好きな児童は、あおむしの起床や就寝に合わせて、「おはよう」「おやすみなさい」と嬉しそうに言っていた。

・教員が「お腹すいてるんじゃない？」などと声をかけると、児童が「お腹すいた」「りんご」のシンボルを押し、あおむしに食べさせる、というようなやりとりができた。

・遊びながら、画面上の状況を説明するような使い方もするようになった。

4） 回答としての使用（9月～2月）

・絵本の読み聞かせをしながら、果物や乗り物について「これなあに？」と尋ね、児童が DropTap で答える活動を行った。

児童の様子

・初めての活動でも、複数のシンボルから自分が思う答えを選んで押すことができた。間違いを伝えると、教員の様子を伺いながら別のシンボルを押す様子も見られた。

5） 児童がボードを作成

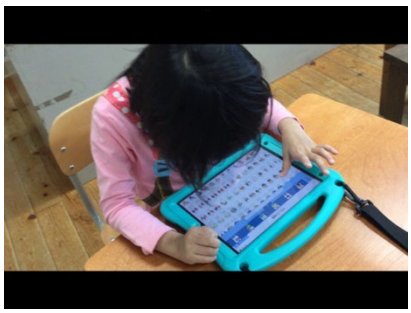
・DropTap のボードを児童が自由に作成する機会を設け、児童の興味関心や内言語を探った。

児童の様子

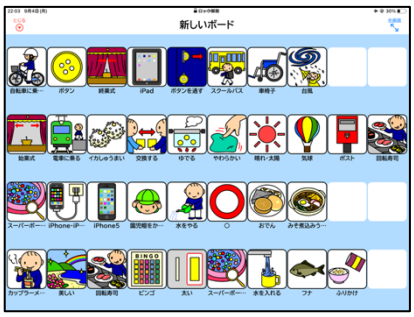
・「iPad や iPhone が含まれるシンボル」「スーパーボールすくい」「いかしゅうまい」「回転寿司」など、必ず選ぶシンボルがある。母親からの聞き取りで、概ね児童の好きなものであることがわかった。

・タブレット端末を操作すること自体も好きなようで、誤って消したり思いとは違うシンボルを選んだりしながらもシンボルをどんどん登録することができた。

・発語が出始めた10月頃からは、自分が発することのできる言葉をボードに登録したい気持ちが強く、身の回りの物や友達をカメラで撮って、音声を入れてほしいと教員に頼むようになった。



（自分でボードを作成する様子）



（児童が作成したボード 7月）

（児童が作成したボード 1月）

6） 家庭での活用（11月）

・iPad を児童の自宅に持ち帰り、活用してもらうようお願いした。

児童の様子

・複数のシンボルを連打したり、カバーを無理やり外そうとしたりする姿が見られ、活用は難しかった。

・母親とは、iPad がなくても十分にコミュニケーションがとれるので、DropTap の必要性が低いのではないかと考え、家庭での活用は中断した。

〇対象児の事後の変化

・挨拶、要求などで DropTap を使うようになり、学級内の担任以外の教員とのやりとりが増え、相手を呼び止めたり、決まった言葉を返してもらえたりすることができるようになった。

・身近な人が聞くとわかる程度の発音で、いくつかの言葉を発するようになった。

・iPad や自分の声で、知っている言葉を伝えることが増えた。知らない物があると、指さしをして聞いたり、DropTap に追加してほしいと頼んだりして、どんどん言葉を増やした。

【報告者の気づきとエビデンス】

〇主観的気づき

DropTap を使用することで、まず、本児は、意味を知っている言葉がたくさんあるということに気づかされた。指導開始前、本児の言葉の理解については、単語での簡単な指示に従うことができるという点でしか判断できなかった。しかし、DropTap を使うことで、挨拶や会話ができること、また、聞き取るだけでなく自分から発信できる言葉があることがわかった。

聞いて覚えている言葉が数多くある本児だが、それを周囲の人に明確に伝えられたのは、初めての経験である。相手から決まった返事が返ってくるのがとても嬉しいようで、やりとりをする中で笑顔がたくさん見られた。iPad を使って自分の言いたいことを伝え、返事をもらう経験を積むことで、もっとやりとりをしたいという気持ちが強くなり、DropTap を活用する頻度が増えた。また、児童自身の声で発する言葉も増えてきている。

また、10月頃、物の名前を言ってほしいという意味での指さしが非常に増えた。これは、やりとりの中で知らない言葉の存在に気づき、もっと言葉を知りたいという好奇心も高まったことの表れではないかと感じている。

〇エビデンス（具体的数値など）

・児童が使うことのできるシンボルの数や用途が広がった。

▼新たに使い始めたシンボル

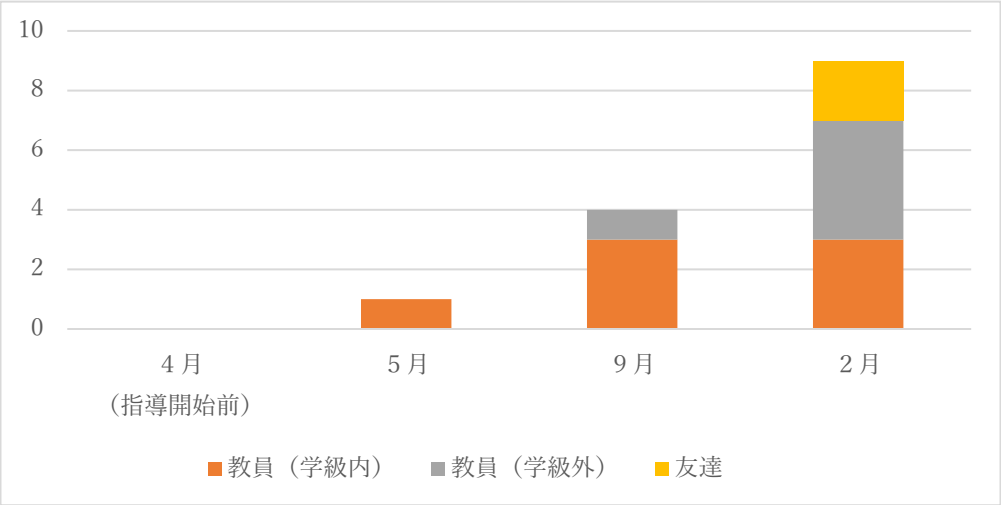
		5月	9月	2月
相手に反応を求める	人の名前	中木のみ	学級内の教員（3名）	学級内の友達 ママ、パパ、兄
	要求	手伝ってください	はさみ 給食のメニューのシンボル	いただきます（まだ食べたいという意味） ください
	挨拶・感想	できた おはよう	こんにちは ありがとう	
△	物の名前		10個程度	100個程度

			（連絡帳、タオル、帽子、水筒、エプロン、お茶、絵本、弁当、テレビなど）	（日用品や食べ物など）
	・真似て言うことで共感してほしい ・教員に尋ねられた時の返答		・自分の確認のため など、使い方は様々	
相手に反応を求めない	挨拶・感想	おいしい	いただきます ごちそうさま できた おなかすいた	おなかいっぱい 頑張りました 難しい

▼発することのできるようになった言葉

11月	12月	1月
・できた ・じいじ ・どん（よーいどん） ・はい、どうぞ ・パン ・ばいばい ・せんせい ・くつ ・くつはくよー	・おー！（かけ声に続いて） ・かばん ・先生さようなら、みなさんさようなら（帰りの会での決まり文句） ・友達の名前（2名） ・デイサービスの名前 ・あし ・トイレ ・スタート	・友達の名前（学級内5名＋学級外5名程度） ・気をつけ、ぴっ！　・1、2、3 ・タオル　・ぼうし ・て　・かぎ ・パパ　・いいです ・OK　・あーあ ・帰るよー　・おかえり ・ただいま　・きたよ ・せーの　・ありがとう ・ごめんなさい ・「〇〇くん、どうぞ」などの２語文

・iPad を使うことで、身近な大人が児童の気持ちを察することなく、コミュニケーションが成立するようになり、自分の想いを明確に伝えられる相手が増えた。また、言葉を発することができるようになり、やりとりをする場が限定されにくくなったことから、友達や学級外の教員などと、さらに広がってきている。



（▲児童とやりとりができる相手の人数と種類）

◯その他エピソード（画像などを含めて）

・人物のボードに「ママ」「パパ」というシンボルを加えると、児童から「〇〇（兄の名前）くん」と、兄を追加してほしいと要求があった。教員の手が開かず対応できなかったので、普段通りであれば諦めるかなと予想していたが、自分で教室に掲示されていた男の子のイラストの写真を撮って追加してほしいと度々要求してきた。イラストの写真を撮ってきて追加してほしいと要求があったこと、すぐに対応できなくても諦めずに度々お願いに来たことから、本児の熱意を感じた。ママ、パパ、兄の3人は、本児の中でとても大切でかけがえのない存在であるのだなと胸を打たれた。

◯今後の見通し

・この1年で、使える言葉がたくさん増えた本児。iPad を通じてだけでなく、児童自身の声で、伝えられる言葉もどんどん増えてきている。友達の名前を呼べるようになり、児童の言葉を聞き取ってくれる友達には、教員を介さずに話しかける姿も見られるようになった。同年代の友達と関わることの心地よさを感じることで、友達と意識的に遊んだり、やりとりを楽しんだりする機会がさらに増えるとよいと期待している。